

果てなく続くストーリー

校 長 武井 正明

決戦を明日に控えた野球部3年生の、今日に至る思いを顧問の大山先生から読ませていただいた。彼らの、あまりに嘘のない正直な文章に感動した。

今日はその中から、ふたりの思いを紹介させてもらいたい。

「…今まで何度も何度も野球をやめようかと迷ったが、やめたら逃げるのと一緒に考えると、思いとどまってきた。最後の自分の調子が万全ではなくても、笑って中学野球を終えたい。そして今まで自分に関わってくれた全ての人々に感謝し恩返しをする」



春先のマウンド。彼の表情には焦りが滲んで見えた。本番に間に合わない。早く結果を出さないと…。思うような球がなかなか行かない。ストライクを取るのに汲々と苦しんでいた。

しかし私は自分を客観視できている彼を感じ取っていた。現在自分がチームの中で、どういう立ち位置で、自分に何が不足しているのか、その克服のために何が必要で何をしなければいけないか、それを自分の言葉でしっかり私に話してくれた。

その矢先の怪我だっただけに、悔しさは計り知れなかっただろう。今ようやくその怪我を乗り越えて、チームのために献身的に動く彼の姿を再三見てきた。心身ともにひと回りも二回りも大きく成長した彼が、私の眼に頼もしく映る。

「自分の野球人生は悔しいばかりだった。…今まで一緒に多くのチームと戦ってきた3年生を最後ベンチで見届けられなかった。それも悔しかった。…あこがれだった9番を背負えた。でも結果が残せずまたベンチ。さらに背番号は11番に下がった。本当に悔しくて涙を流した。今も思い出すと悔しい。でも、この経験があったから自分は強くなれた。だから優勝できたい。悔しくてもあきらめなければ報われる。この最高の仲間と喜びを分かち合いたい!!」



この明るさがいつもチームを鼓舞し、救ってきた。周囲から期待されるムードメーカーという役割の陰で、顔で笑って心で泣いて…彼はどれだけ悔し涙を流してきたことだろう。

2年前の朝、自転車で転倒した生徒に駆け寄った私に逸早く「僕にできることはありませんか？」と飛んできたのは彼だった。彼はそういう男である。挫折を知っているから人に優しくなれるのだ。優しさは強さだ。

それぞれに物語がある。思い悩み、迷うのが青春だ。そして君たちの人生のストーリーはまだまだ続く。その序章を感動で迎えようじゃないか。その仲間に私も入れてほしい。